

マレーシアとインドネシア

—開かれた国と閉ざされた国—

吉井良三

《日本人がインドネシア語を習うのと、インドネシア人が日本語を覚えるのと、どっちが難しいですかね》

《おなじですよ——ただね、漢字というやつ。だから、会話だけならばね》

答えているのはボゴール大の林学部の、副学部長のカマルディン君である。彼の日本語は私よりも上手だ——ただし、会話だけならば。

インドネシア人が日本に来て、しかるべき業績をあげようと思えば、どうしても日本語を学習する必要がある。だからわれわれ日本人も、インドネシアで仕事をしようと思えば、どうしてもインドネシア語を学習する努力を覚悟しなければならない。少なくとも、実りのある成果を期待するのならば。おなじ東南アジアであっても、マレーシアではそのようなことはなかった。公文書はもちろんマレー語で書かれていても、よくしたもので、われわれ外国人に必要なところは、誰かが気をきかせて英文訳をつけている。仕事の上での相談も学術上の論議も、すべて英語ですむ。マレー語で云おうとしても適当な表現をさがしているうちに、学術用語などで行きづまって、またもとの英語にもどる。そして、そのときのものの考え方についても、あまりわれわれと違わない。私たちの交流のためには、マレーシアは開かれた国である。

ところがインドネシアでは事情がまったくちがう。英語だけではどうしようもない。表面的な国際交流はさておき、人間と人間とのあるいは研究者と研究者との思想交流となれば、英語だけではこれは不可能にちかい。インドネシアは閉ざされた国のごとくである。Xenophobia とヨーロッパ人がここの社会を表現したが、それもうなずける。だが、これは結果論なのである。彼にはこの国の社会に入り込むための努力がたりなかったわけだ。だいいち近代社会の建設をめざしているインドネシアが、Xenophobia であるわけがない。ジャカルタの JICA 事務所のある Thamrin 通りを夜、高級車に乗って通るがいい。窓からみる街の景観はヨーロッパの大都会にまさるともおとらない。スナヤンにあるインドネシアの林業省の建物は、筑波にある林試よりもはるかに立派である。しかしその翌日におなじ街角を歩いてみよう。ひどいものだ——クリークのなかはゴミでうずまわっている。歩道橋はひんまがり、歩道のところど

YOSHII, Ryozo : Malaysia and Indonesia—Open Society and Closed Society
京都大学農学部

ころでは暗渠の蓋石が落ちているし、敷石のあいだからボルトが首をだして、気がつかないと転倒する。私の止泊していたホテルは3つ星にランクされている立派なホテルであるが、その食堂でメニューを注文すると、しばしば始めにコーヒーがきてそれからメインディッシュがきて、そのあとからスープが出る。たいへんおおらかでよろしいが、注文していないものが出てきたり、食べていない料理が勘定書きにはいつていたり——このようなインドネシアの日常生活に順応するのに、私のばあいは6か月くらいかかった。まだいまでも完全とはいえないで、ときどきカルチュア・ショックをうけている。だから自分の国の社会通念から遊離することができないし、たしかにインドネシアは Xenophobia とうつるだろう。だがこの国は例えてみればウニのようなもので、外側には堅い殻があり、するどい棘があるが、内部はぐにゃぐにゃになっている。この内部構造にまで立入ることができると、こんどはインドネシア・マニアになってしまう。このあたり私はこの国の人はフランス人にちかいようにおもう。いくら下手でもいい、かたことまじりでもいいが、とにかくフランス語らしいものを苦勞してしゃべりさえすれば、それだけの対応をしてくれる。それをサボって英語でやると、仕事の上での表面的な交流にとどまり、うっかりドイツ語でも使おうものなら、できる話もできなくなる。

おなじ東南アジアにありながら、マレーシアとインドネシアとではどうしてこれほどの違いがあるのだろうか。いろんな考え方があるだろうが、私はそれを人種構成のちがいによると考えたい。マレーシアは多民族国家である。マレー人のほかに中国系、インド系、シンハリ系などがいて、共存することを強いられている。たとえ政府のトップはマレー人であっても、その下には、いろんな人がいて、それぞれの生活を持っている。——とすると社会全体としては、それらの社会的思考体系の最大公約数みたいなもので統一を計らねばならない。そしてその公約数みたいなものが、現代の世界に一般に通用するものに、かなり近い。したがってわれわれ日本人がヒョイと飛込んでも、大した異和感はないことになる。それでもときどき戸まどうことはあったが、ところがインドネシアはそうでない。この国の国是のひとつに《多様性のなかの統一》というのがある。たくさん民族が、たくさん島に住み、それぞれが特有の言語と文化を持っているのだから、これを統一するのは容易なことではない。だが、これは国家として必要である。そこで統一を目指すのだが、それはマレーシアとちがって最大公約数によるのではない。そうではなくて、中部ジャワのいちばん文化的に進歩した地方を、ひとつの標準としてみんながそれに歩調を合わせることになっている。その内容はわれわれ日本人の持っている社会通念とは、かなりちがう。

そこで結果としてどういうことになるか。マレーシアでは英語さえしゃべっていれば仕事の上での不自由はない。ただ個人的なつき合いとなると、マレー語でありその他のいろんな言語ということになる。ところがインドネシアでは英語だけではジャカルタでの生活にも不自由する。たとえ相手が英語のできる知識人であっても、個人的な交際ともなれば、英語では、まずだめ。玄関で相手をしてくれればいいほうで、下手をすると門前払いをくう。そしてインドネシア語の片言ができて、はじめてやや人

間らしく取扱ってもらえる。やっと玄関から座敷までは通してくれる。だがこれからが問題である。

橋梁をかけ、道路を整備するための技術を供与し、指導するにはこれでいい。だが一歩進んで例えばアグロフォレストリーなど人文的な方向での協力となると、これでは足りない。どうしても土地の言語を知りこれでもって座敷から台所にまではいり込まなければ、——というわけで1年やそこいらでは、とてとても。インドネシア語と現地語との通訳では、タマエしか聞かせてもらえない。そしてこの国では、タマエとホンネとの距離は、新興国であるだけに、日本におけるよりも、はるかに大きい。

京都大学で停年をむかえたあと、私は東マレーシアのサンダカンにある州立森林研究センターに派遣され、5か年間でこの昆虫部の設立をお手伝いした。これは何とかものになった。熱心なカダザン族の助手が、いまは研究に専念している。だが、このたびはインドネシア、それもカリマンタンのサマリダにある熱帯降雨林研究所の運営をジャカルタから援助すべき立場に立った。とてとても私の能力の限界を超えていることがわかった。この1年ではどうやら玄関からすこし敷居をまたぐことができた。閉ざされた国は閉ざされているために、それだけにマレーシアよりも魅力はあるが、下手に入り込めば、こんどは出られなくなることもある。

日本の海外援助が従来の技術援助からだんだん研究援助に、その範囲を拡げようとしているのは当然のなり行きであろう。よく云われるように、発展途上国の蛋白源を確保するために、初めは漁網と漁船を供与していたのが、やがて造船と冷凍設備の設置になり遂には海洋学の研究に至るのは自然のなりゆきでもあろう。このような研究協力が、われわれの関係している熱帯降雨林のプロジェクトなのだが、ここでも問題がおきる。

だいたい、日本の研究者には2つのタイプがあるように思われる。かりにこれを囲碁型と将棋型としておこう。囲碁というのは要するに陣取り合戦であって、つまりシエアをどれだけ獲得するかが最終目的であり、これを研究の場に持込めば、いかにしてその方面の権威者になるか、要約すればそれによって文化勲章がもらえればそれで優勝がきまる。これに反して将棋型の研究者はまず研究の目的を定める。どこにその研究のターゲットがあるか、これが定められなければ敵陣のどこに王将があるのかわからないわけで、これでは研究のしようがない。つまり発想法が先行するわけだが、いったんこれが定まってしまうと、そのあとはどうしてその王将を詰ませればよいか、という方法論になる。幸いにしてこのとき敵から攻められることはまずない。だから、ちょうど詰将棋のような経過をたどる。ときには詰めたと思った敵のコマが王将でなかったりもするが、だから多少カケのような要素もある。だがその王将が思いがけない大ものであるときには、世界的な反響を呼ぶ。ノーベル賞などはこうした結果としてもらうもので、はじめから意図するものでないが、そうなると文化勲章などはあわててそのあとに追いかけてくる。

東南アジア諸国における国際協力事業団の技術協力は、まことに目ざましい。そし

てそれがこれから研究協力にも及ぼうとしているわけである。特に熱帯林業については、これらの課題がいっぱいあり、いずれも今後の研究協力にまたねばならないのだが、そのときにはどうしても将棋型の人でなければならぬ。囲碁型の人はいくら現地派遣されても、まず目標の設定ができない。それでは現地の研究者もついて来ないし、成果は挙がらない。もしもその国が開かれた国であるならばバカにされるだろうし、開かれざる国であればソップを向かれるのがオチである。

欧米各国から東南アジアに派遣されている人達は、わたしの知っているかぎりでは、キリスト教のミッションにみられるように、将棋型が大勢をしめている。みんな、はっきりした目標を持ち、使命感を持っている。日本の協力、援助もこのなかにならして、立派な成果を挙げられるように望むこと切なるものがある。

●お知らせ

このたび、「熱帯植物要覧」(大日本山学会発行)の第2版が発行されました(一部改訂)。また、この機会に発売所が今までの山学会から、株式会社養賢堂に移りましたので、購入希望の方は、直接あるいは最寄りの書店にお申し込み下さい(養賢堂 〒113 東京都文京区本郷 5-30-15, 振替東京 2-25700, 電話 03(814)0911)。定価 4,500 円, 送料 250 円。

本書は、樹木、作物、果樹、花、竹、シダ類、食用菌類など約 3,000 種の名称、分布、性状、用途が要領よく簡潔にまとめられ、携帯にも便なところから、植物研究者はもちろん、熱帯地域へ調査に出かける人や熱帯植物愛好家の間で特に重宝がられています。

なお参考までに、本書は今まで次の方々(敬称略)の推薦を受けております。津山 尚(お茶の水大学名誉教授)、土井恭次(前林業試験場長)、石塚喜明(北海道大学名誉教授)、伊藤洋(東京教育大学教授)、須藤彰司(林業試験場木材部材料科長)、朝日新聞社書評委員会など。